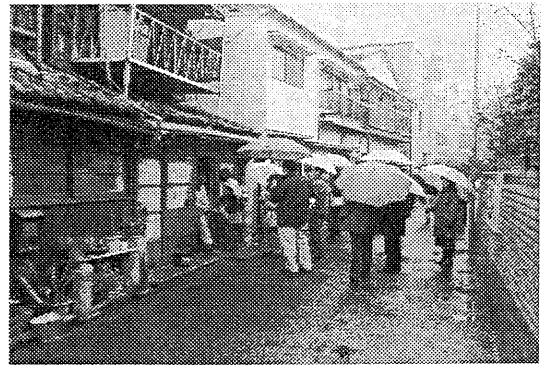


第2回

まちを活かし
まちとともに成長するすまい



「いちてらことといちく」という不思議な響きのする言葉を聞いて、皆さんはどんなイメージをもたれるだろうか。今回私たちが歩いたのは、漢字で書くと「一寺言問地区」、墨田区向島に位置する、いわゆる東京の下町である。実はこの「一寺言問」という地名は存在しない。正確には現行の住居表示には存在しないだけであって、以前からの由緒あるこの地名をもとにした「第一寺島小学校」と「言問小学校」があり、これらが防災拠点となったことから名づけられた地域の呼び名である。

墨田区向島は、西に墨田川が流れ、北に地域の祭りなどでにぎわう白鬚神社や向島百花園がある、木造密集地だ。車で通り抜けるのは少々無理があるが、歩いていくにはちょうどよい路地が迷路のように入り組んでいる。消防車も侵入できない路地の多いこの地域では、まちづくりの大きなテーマは「防災」ということになる。私は大学の卒業論文で、隅田川を挟んだ向かい側の荒川区の再開発をテーマに選んだが、木造住宅がきれいな高層建築に姿を変えたその地域は、域外からの多くの新住民を迎え、コミュニティの変質に直面していたことを思い出す。

ちょっとした空き地を「まちづくり事業用用地」として活かし、地域の防災拠点をこれまでの住宅と街並みの中に配置していく一寺言問地区の手法は、大規模再開発とは明らかに趣きを異にしている。雨水を貯めて防火用水に利用する「天水桶」や、狭い路地の一角に配置された「路地尊」などからは、地域資源を活かしながら課題に向き合う住民の気概が伝わってくる。なにしろその粋な感じが素敵だと思

う。そんな地域へのこだわりを持った人が今も住んでいるからこそ、若いアーティストが木造長屋を利用して個展を開きたくなるのだろう。建築士や大学の研究者などの専門家が、専門家集団「SONOTA」としてこの地区のまちづくりに参加しているのも、こんな町の魅力に惹かれてのことであろう。

今回、真野さんのご案内で一寺言問地区を歩き、この地域で進められているコーポラティブ住宅の建設計画を聞くにつけ、住宅とまちの融和について考えさせられた。権利関係が錯綜している木造密集地区の建替えは、たとえば第1期、第2期と工期を分けて行う方法もある。行政の施策とも関連するが、接道面積の確保もポイントとなる。そして町全体として災害に強い形に作り変えていくわけである。

連続見学学習会第2回では、内側に閉じた空間としてのコーポラティブ住宅ではなく、外部との接点を常に持ちながら、まちの一員としてそこに存在する、そんなコーポラティブ住宅のイメージを持つことができた。

国立の巨大マンションが、通りの景観を壊すとして、地元住民の大反対に遭ったことは記憶に新しい。誰しも良いまちに住みたいと思うし、きれいな景色を自分のものにしたいと思う。ただ一度そこに自分が暮らせば、自分もまちの景色の一コマになる。

まちと融和しながら、まちとともに育つ、そんなコーポラティブハウスに住みたいと思いませんか？

(中原区/広岡 真生)